

神奈川大学大学院人文学研究科開設記念シンポジウム

「日本文化を拓く―その可能性の沃野―」

外国語学研究科委員長 辻子 美保子

2024年4月に本学大学院人文学研究科が開設されることを記念して「日本文化を拓く―その可能性の沃野―」と題するシンポジウムが、2023年11月24日、みなとみらいキャンパス米田吉盛記念ホール及び米田吉盛記念講堂にて開催されました（主催：外国語学研究科、共催：神奈川大学、後援：国際日本学部・外国語学部・人文学研究所・人文学会）。

人文学研究科は、外国語学部と国際日本学部の2学部を基盤とする総合的な大学院として外国語学研究科の改組によって設置されるもので、既存の2専攻に加え「日本文化専攻」が新設されます。この人文学研究科及び日本文化専攻の開設を学内外に広く告知すべく本シンポジウムを開催しました。また、日本文化専攻の新設によって、学部から大学院まで一貫した日本文化の研究拠点が整備されますが、この新たな研究拠点の将来像や日本文化研究の可能性について考える場を提供すべく、日本（江戸）文化の代表的な研究者である田中優子氏（法政大学名誉教授・法政大学前総長・法政大学江戸東京センター特任教授）とロバートキャンベル氏（早稲田大学特命教授・早稲田大学

国際文学館顧問・東京大学名誉教授）をお招きして講演及び対談を行いました。本学小能誠学長のご挨拶、研究科委員長による趣旨説明により開会し、深澤徹先生（司会）、上原雅文先生・藤澤茜先生（コメンテーター）にもご登壇いただきました。事前申込みが500名を超えるほどシンポジウムへの関心は高く、当日も400人強の多数の参加者が集まる盛会となりました。

田中優子氏の講演は「循環する言葉とものと文化―江戸時代の人々はどのように都市と文化を創っていたか―」という題目で、江戸時代は1560年代に完成したグローバリゼーションに



田中 優子氏 講演

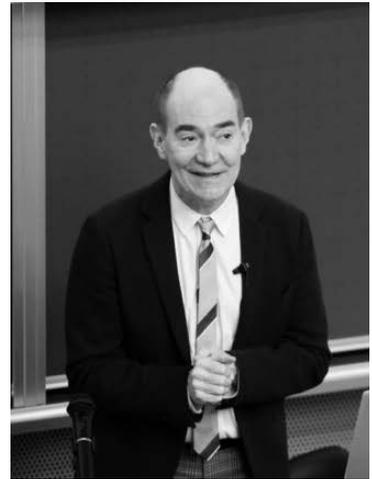
独自の対応をしつつ循環システムを整備することによってもたらされた持続可能社会であったことが、農村で生産されたものが都市に送られ、都市で不要となったものが農村に戻され生産物に還元されることなど多様な例を挙げて説明されたほか、古いものから新しいものを生み出す形で歌舞伎・物語・絵画等々の創造を行っていた文化の循環についてもお話いただきました。

藤澤茜先生からは、江戸時代に整備された循環システムは現代のリアル・デジタル・リユーズの考え方にも繋がる重要なものであること、海外のアイデアをも採り入れながら古いものから新しいものを形にする文化の重層性が浮世絵や歌舞伎などにも見られることを日本文化の専門家の視点からおまとめいただきました。

キャンベル氏の講演は「武器にもシェルターにもなる言葉と『日本』』という題目で、ウクライナの詩人オスタップ・スリヴィンスキー氏が集め



コメンテーター 藤澤 茜先生



ロバート キャンベル氏 講演

た名もなき人々の証言から物語が生まれていく過程や戦争という不条理のもと言葉や価値観が変容していく在り様についてお話しくございました。

上原先生からは、歴史的な出来事のみならず現在起こっている戦争・感染症・自然災害等について人々が語ることを通して人間の根源的な物語が生まれ、そこから倫理やモラル



コメンテーター 上原 雅文先生

を共有した心の共同体において文学が発生することを思想史の観点からおまとめいただきました。講演に続く対談においては、参加者から出された質問をもとに、様々なトピックについての活発な議論がなされました。そのトピックは、感染症流行や戦争という状況の中で文学・芸術が生まれる過程やそれらの対象に対する研究者としての向き合い方、江戸時代の教育と現代の教育に係わる

問題、女性が働く環境の変化、フェミニズム・ジェンダー論、日本語と文化・思想・政治の関係など多岐に亘るものでした。

参加した学生からも様々な感想が寄せられました。誌面の都合上、一部のみを紹介します。

・日本文化、特に日本語とそれに対する現代人の認識について考えさせられるよい機会だったと思う。これから生きる世代として文化のもつ力の意味をもう一度考えながら今後の研究及び自身の創作活動に活かしていきたい。(歴史民俗学科学生) / ・今回自分の気になっていた「循環」についてのお話が聞けて大変勉強になりました。(国際文化交流学科学生) / ・「音のある文学」というキーワードが講演・対談の中で何度も出てきたのがとても印象的でした。実際、私たちの日常生活の中ではウクライナに住み戦争に巻き込まれている人々の話を聞く機会はなかなかありません。しかし、キャンベル先生の紹介されていた本の一部で使われている一人称により当事者の声をよりリアルに感じました。(国際文化交流学科学生) / ・田中優子先生の講義を通して、江戸時代の持続可能性の考え方の芽生えがありました。それを実践していった中で新しい技術が生み出されたことや技術の急速な発展の中でも文化を廃れさせることなく守り発展させていったことを学びました。キャンベル先生の講義では、言葉の意味の変容について戦争など様々な観点から学ぶことができました。(国際文化交流学科学生) / ・最後の対談では、講演とは異なる視点で今回のテーマについて

て語られていたので、多角的に物事を捉えることができたのでとてもよかったですと思います。(国際文化交流学科学生)

講演・対談を通して、「日本文化を拓く」可能性を秘めた数々のテーマが浮かび上がりました。例えば、キャンベル氏の講演で言及されたように60〜70万タイトルにも及ぶ江戸時代の未だ手つかずの文献を紐解いて物語の生成や文化の構築を明らかにすることや、田中優子氏の講演で提起されたなぜ江戸時代は戦争を回避できたのかという未解決の問題を解き明かすことの重要性など、現代の社会的・文化的諸問題にも繋がる重要な論点が明らかになりました。こうしたテーマに対して国際的な視野をもって様々な観点から日本を見ること、新たな人文学研究科・日本文化専攻における教育研究活動の重要な柱となるであろうと思えます。今回のシンポジウムによって、日本文化をより深くより広く研究したいという人が人文学研究科・日本文化専攻に集い、知の交流・創造が始まることを期待しています。



対談の様子